

# 環 87

KAN  
建材ニュース

インタビュー

a view from the architect

— 建築家の視点

大西 麻貴氏

百田 有希氏



INDEX

- interview 02 **a view from the architect**— 建築家の視点 **大西 麻貴氏**  
**百田 有希氏**
- TOPICS 07 **第2回NEG建築家セミナーを開催しました!**
- 実例紹介 09 耐熱合わせガラス **ニューマン高輪**  
15 耐熱合わせガラス **広島駅南口ビル minamoa**  
17 ファイアライト®F **LiSH**  
19 ファイアライト® **銀座高木ビル**
- NEWS 23 **火災時の高温と急冷に耐える唯一の防火ガラス、ファイアライト®**
- 実例紹介 25 ネオパリエ® **エスパシオ ナゴヤキャッスル**  
27 ガラスブロック **千葉日本大学第一小学校**  
31 ガラスブロック **佐嘉平川屋 in 和多屋別荘**

表紙 **ニューマン高輪** [東京都]

運営者/ルミネ 建築設計・工事監理/品川開発プロジェクト(第1期)設計共同企業体(JR東日本建築設計、JR東日本コンサルタンツ、日本設計、日建設計) 内装設計・デザイン監修/sinato、PRINT&BUILD (South・Northエリア)、MYU PLANNING(LUFTBAUMエリア) 内装実施設計・工事監理/大林組一級建築士事務所 施工/大林組(建築・内装)、乃村工芸社(内装) 使用製品/耐熱合わせガラス  
竣工/2025年 写真/家撮り部 田邊杏佳

※詳細は本文P9-14をご覧ください。

誌名  
「環」について

建材ニュース「環」の誌名は、まるい「輪」の形にちなんでおり、設計事務所・建設会社・メーカー・販売店が手をつないで「輪」となることを目指して名づけました。また、円満の「円」にも通じるような、皆が満ちて豊かになるという想いも込めています。

a view from the architect — 建築家の視点

建築とは、生きることすべてに関わることができるもの。  
o+hの大西麻貴氏と百田有希氏は、建築と人とが双方向に関係し、互いに普遍的な価値を生み出し合う場をつくり続けています。  
今、建築する空間が、過去や未来をも包摂するようにと願いつつ「生きた全体」を紡いでいく二人にお話を伺いました。

interview

**大西 麻貴氏**  
**百田 有希氏**



熊本地震震災ミュージアム KIOKU (熊本県、2023) ©Takumi Ota



# 人と建築の関係性の連鎖から 「生きた全体」をつくる。

## 二人、同じ環境で建築を学び始める

—— 建築を志したきっかけを教えてください。

大西：初めて建築に興味を持ったのは中学2年の時です。スペインでサグラダ・ファミリアを見て、ガウディという一人の建築家の構想を彼が亡くなった後にも多くの人が引き継いでいることに驚きました。この頃から、将来は建築家になりたいと思っていました。

百田：僕は小さい頃から主要5教科よりも副教科が得意な子でしたが、「美術やスポーツで生きていくほどの才能はないが、建築ならものづくりに関わっていけそう」と何となく建築を選びました。京都大学に入学して、初めて出会った建築家は高松伸さんです。ヨウジヤマモトの黒いスーツに細いネクタイを着けたスターが半分高校生みたいな僕たちの前に現れ、初めての課題で「君たちのつくった模型はすべてゴミや!」と言われてびっくりしました(笑)。

大西：わたしも百田さんと同級生でしたので、同様に高松さんから「建築のプレゼンテーションは美しくあらねばならない」という姿勢を叩き込まれました。トレバの角が折れていたらもう見てもらえないのです。建築はそういうものだと思っていました。

百田：そして3回生の時、非常勤講師として伊東豊雄さんが現れました。彼は「あなたにとって、建築とは何なんだ」という問いを投げかけてくださった。突然自分自身

にとっての建築を問われ、すごく悩みました。

—— 大西さんから見て、百田さんはどんな学生でしたか？

大西：1回生の最初の課題はミース・ファン・デル・ローエ設計の「バルセロナパビリオン」の模型をつくるというもので、百田くんはガラスとサッシを抽象化してアクリルで表現した模型をつくって、「これは綺麗だね」と学年の中でも唯一先生から認められていました。ものづくりが得意で、学園祭では友達に声をかけて不思議な形態の巨大な木材の屋台をつくったりもしていました。

百田：そう。でも捨てるところまで考えていなくて……大学の空き地で木材に灯油をかけて火をつけて燃やすことにしました。そうしたら想像を上回る火柱が立ってしまい、「ああ、僕はこれで退学か」という思いが頭をよぎりましたね。すぐに燃え尽き、退学にもならず今がありますが(笑)。

大西：百田くんがいると自然と場が盛り上がるんですよ。わたしは仲間をつくるのが得意ではなく、設計課題もひとりで黙々とやるタイプだったのですが、彼と一緒にやると自分ではできないことができるような、可能性がひらく感じがしていました。

—— では百田さん、大西さんはどんな学生でしたか？

百田：僕はまったく逆のことを大西さんに感じていました。彼女が「こうしたら面白い」と言葉でヒトに伝えると、聞いた人が内発的に「やりたい」と思って動かされ

てしまうんです。最近、僕は宇宙に興味を持っているせいか、「大西さんって銀河みたいな人だな」とよく思います。本人は自ら思うように動いているだけなのに周りの時空を歪ませて、近くに通ったものの軌道を変えてしまうような人だな、と。大西さんは芯が強く勝気なんです。一緒に課題をしているとかわいらしい側面も見えてくるんですよ。模型を一生懸命作りながら、同じ失敗を学ぶことなく繰り返していたり(笑)。僕がスランプに陥っていた3-4回生の頃、大西さんは開花していきました。彼女は建築のスキルが備わる前に、自分のやりたいことがあったんですね。少しずつ表現の仕方が分かってきて、一気に形になって表れてきたのだと思います。

## 相手の魅力も開花の時期も 隣で感じつつ、ともに歩む

—— 大学卒業後は、それぞれどんな進路に進んだのでしょうか？

百田：僕は京大の修士課程に進み、大西さんは東大の

修士課程へと進みました。修了後、福岡市のアイランドシティにあずまやをつくるプロジェクトにチームで参加したとき、全体のディレクションをしていた伊東さんから「君がプロジェクトリーダーになりなさい」と声をかけてもらったんです。伊東さんのスタジオでいい結果が出せずにいた学部時代のトラウマがここでようやく解けた、僕にとっては大事な瞬間でした。

……で、ここで怒ったのが大西さん。「なんで私じゃないの?」って(笑)。その腹いせか、僕の人生を変えたこのあずまやの模型が入った紙袋を「なくさないでね」と大西さんに預けたのに、「荷物が多かったから福岡空港に捨てた」と。目が点になりました。

大西：わたしの我が強すぎるのを見て、伊東さんは「こいつはリーダーじゃない」って思ったんでしょうね(笑)。

百田：修士1年のとき、伊東さんから「所員にならないか」と誘われましたが、大西さんと2人で進めていた仕事があったので1年待っていただきました。伊東事務所に5年ほど勤務した後、大西さんとともに設計事務所o+hを本格的に立ち上げました。

1 2 Good Job! Center KASHIBA (奈良県、2016) ©Yoshiro Masuda



## 長い関係性のなかで 弱いプラスの力を蓄積させる

——o+hとはどんな建築事務所でしょうか？

大西：建築とは生きることすべてに関わることができるものだという可能性を考えてみたい、建築と人間の関係を問い直し続けたいという思いから「愛される建築」を目指した設計活動を続けています。たとえば、この事務所は1階の開口部をフルオープンにすると通りから中が丸見えます。それで興味を持って事務所を覗いてくれたり、顔見知りができたりとまちとの関係が体感できます。通りかかった子どもが「模型を見てもいいかな？」と寄ってくるのは、空間から「見てほしい」と語りかけるからです。

設計以外にも「o+h books」という出版事業や、事務所1階を会場にした勉強会「浜町リベラルアーツ」という不定期なレクチャーやワークショップのイベントも開催しているのですが、これも建築活動の一部と捉えています。

百田：大西さんは人間とモノとの関係を中心に、僕はモノとモノとの関係を中心に見ていくところがあり、そうしたスケールの異なる多様な関係性をいくつも重ね合わせ、全体として特別な調和を築きたいと思っています。たとえば「熊本地震震災ミュージアム KIOKU」の設計では、自然の猛威からの復興のプロセスを伝える必要があると同時に、阿蘇の雄大な自然がより身近に感じられるよう、屋根は風景を切り取るようにかけられています。建築は内部空間で何をするかで用途が決まりますが、生まれた建築は環境にとっての一部になる。そうした位相の異なる事象をうまく橋渡しできる存在になれているといいですね。

——建築も関係を築く主体になるという考えですね。

大西：人が建築をただ使役するのでもなく、建築がただ美しく独立した存在としてあるのでもなくて、建築が人を愛し、人も建築を愛して、互いに関係を結べる相手になるといい。わたしたちが目指している「愛される建築」というのは、関係性の中で時間をかけて成長していける建築のことなんです。

百田：世の中での価値は能力や性能などで測られがちですが、いろいろな関係性の中での存在になりえたとき、単一的な価値では評価されなくなります。たとえば人間だと「この職業の人」というレッテルだけで見られるのではなく、誰かの親であり、子であり、親戚であり、



シェルターインクルーシブプレイス コバル (山形県、2022) © Copal

多様な関係の中に存在します。建築もそうした存在になれると思うんです。そんなふうに関係性の中で小さなプラスの力を重ねて、大きな力を生み出していきたい。物理に置きかえて考えてみると、たとえば重力というのは±(プラスマイナス)ではなく、+(プラス)しかないんですよ。且つ、すごく弱い力でしかない。そして建築を設計するときも運営するときも、長いプロセスを経てちょっとずつ+の力を蓄えていけるのが面白いところではないかなと思っています。

## 過去や未来をも包摂する「生きた全体」

——NEG建築家セミナーでご講演いただいたテーマ「生きた全体 - a living whole」とは何でしょうか？

大西：たとえば公共建築をつくる時、地域の方々と対話すると言ってもそのときその場にいる限られた人しか出会えませんが、建築は何十年とその場に残るものであり、その矛盾をずっと感じてきました。でもある日、小豆島のお祭りで海に向かって太鼓を担ぐ男たちを見ながら「今ここに人たちの中に、過去の小豆島の人も未来の小豆島の人も“入っている”」と感じました。今、目の前にいる特別な誰かとしか会えなくても、深く知ることによってその人の固有性を越え、普遍的なものになりうるという感覚です。そうした個人的な弱い円が重なり合うことで、全体を包摂するような「生きた全体」になるのではないかと感じました。

百田：ひとつの大きな輪に全体を包摂しようとするので

はなく、特別な誰かを出发点とする複数の輪に包摂されるイメージですね。

——「生きた全体」はどのような建築として設計されているのでしょうか？

百田：今、鹿児島県の桜島に8校あった小中学校をまとめて1つの義務教育学校にする設計プロジェクトを進めています。そこでは島のみなさんと「学び方づくり」から考えているところなんです。薩摩藩には「郷中教育」といって、先生だけでなく先輩が後輩を教えるという教育のしくみがあり、それに地域の人たちは誇りを持っていました。これに倣い、休み時間や放課後は先輩が後輩を教えるという状況が自然と生まれるよう、学年の違う3クラスで1つの場所を使う分棟形式の校舎を計画しています。

大西：広い廊下は全部図書室で、クラスで授業を受けるのが苦手な子は廊下でも授業が受けられるようになっています。今はタブレットで自宅でもどこでも授業が受けられるから、学校は楽しくなければ子どもにとって行く必要がなくなってしまいます。いろんな“居たくなる場”があり、場と人との関係性が連鎖していくことで「生きた全体」が生まれてくるのだと思います。

——最後に、素材としてのガラスの魅力や、今後のガラスの可能性について聞かせてください。

大西：学生時代にハッとしたのは、西澤立衛さんが「虹のような透明性、雲のような透明性」という言葉を使われていた時でした。何もないほうがいい、という前提で

ガラスを置くのではなく、“ガラスがある”ことがより透明性を強化するように考えたときに何ができるかを考えていきたいです。

百田：物質として「ある」ことをもっと積極的に感じるガラスを見てみたいです。より透明で、厚みが均質であることが望ましい、というのがガラスの評価ですが、厚みが変化したり、光の感じ方が変わったりするような、あることをプラスに変換していくガラスのあり方を想像しています。

——大西さん、百田さん、ありがとうございました。

※2025年9月のインタビューを記事にしたものです。



大西 麻貴 (おおにし まき)

1983年愛知県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。2008年京都大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2008年- 大西麻貴+百田有希/o+hを共同主宰。2016年- 京都大学非常勤講師。2022年- 横浜国立大学大学院Y-GSA教授。



百田 有希 (ひやくだ ゆうき)

1982年兵庫県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。2008年同大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2008年- 大西麻貴+百田有希/o+hを共同主宰。2009-14年伊東豊雄建築設計事務所勤務。2017年- 横浜国立大学非常勤講師。

## 第2回NEG建築家セミナーを開催しました！

日本電気硝子と電気硝子建材は、建築界との持続的な対話を目指し、2025年11月、建築会館ホールにて「NEG建築家セミナー」を開催しました。第2回となる今回は、近年建築界で頭角をあらわし、一目おかれている建築家ユニット「大西麻貴+百田有希/o+h」<sup>※</sup>を講師にお迎えしました。設計事務所や建設会社、メーカーなどから約80名の建築関係者に参加いただき、会場は和やかな雰囲気になりました。また、定員を超える申込みに対応してZoomによるライブ配信も実施。全国から約200名にものぼる方々に広く視聴いただきました。



### ■講師に「大西麻貴+百田有希/o+h」が登場

講演テーマは、o+hの設計コンセプト「生きた全体」。これまで手掛けてこられた作品を挙げつつ、建築を単なる物体ではなく、人々の営みや自然、時間の流れとつながる“生き物”として捉え、内と外を結び、過去・現在・未来にわたる関係性を育みながら共に成長する建築を目指す考え方が紹介されました。作品ごとの設計コンセプトやプロジェクトの進め方、当時のエピソードなどを交え、ポジティブな側面を広げる思考プロセスや、建築を社会と結びつける視点が語られ、参加者にとって多くの示唆を与える内容となりました。

参加者からは「利用者に一貫して寄り添う視線で設計されていることがよくわかり、とても感銘を受けた」「施主はもちろん、地域を巻き込みながらの設計手法が大変参考になった」「場所をつくって人が集まり、豊かになるという考えに触れて学びになった」など、深い共感の声が数多く寄せられました。



大西麻貴氏と百田有希氏

※ 大西麻貴氏と百田有希氏のプロフィールは、本誌P6をご参照ください。

【主な作品】  
シェルターインクルーシブプレイス コバル(山形県、2022年)、熊本地震震災ミュージアム KIOKU(熊本県、2023年)、Good Job! Center KASHIBA(奈良県、2016年)ほか

### ■建築界との関係をより深める場として

会場内では、o+hの作品「Good Job! Center KASHIBA」「house h」「称名寺 鐘撞堂」の建築模型3点を展示し、来場者は熱心に見入っていました。

あわせて、日本電気硝子の防火ガラス ファイアライト<sup>®</sup>シリーズを紹介。展示エリアを、防火設備用ガラスコーナーと特定防火設備用ガラスコーナーに分け、防火ガラスそれぞれの特長を示しました。防火設備用ガラスコーナーでは、ファイアライト<sup>®</sup>を使用した三協アルミ社、LIXIL、エクセルシャノン各社の新しい高断熱窓を展示。特定防火設備用ガラスコーナーでは、アルスの木製枠FIX窓やパイロシステムの鋼製枠2連窓FIX窓のほか、三井化学のポジカ<sup>®</sup>くつきり<sup>™</sup>フィルムを貼付したファイアライト<sup>®</sup>Fなどが注目を集めました。

日本電気硝子と電気硝子建材は、これからも「NEG建築家セミナー」を継続的に開催し、建築家との対話を重ねながら新しい価値の創出や製品開発に取り組み、建築界の発展に貢献してまいります。



ファイアライト<sup>®</sup>を使用した三協アルミ社「エスティナ」など、省エネ性能を備えた高断熱防火窓。



飛散防止や防犯フィルムを貼り付けたファイアライト<sup>®</sup>Fと耐熱合わせガラス ファイアライトプラス<sup>®</sup>ネオ。



ファイアライト<sup>®</sup>のアンバー色を消色するフィルムを貼り付けたファイアライト<sup>®</sup>Fも注目を集めた。

### 【主な受賞】

2023年日本建築学会賞作品賞、第34回村野藤吾賞、第64回BCS賞(以上すべて、シェルターインクルーシブプレイス コバル)、2024年度 JIA日本建築大賞(熊本地震震災ミュージアム KIOKU)ほか <https://www.onishihyakuda.com/>

# 高輪ゲートウェイにゼロから生まれた 日常を紡ぎ出す“まちの玄関口”

大開発の進む高輪ゲートウェイに誕生した「ニューマン高輪」は、商業施設の枠を超え、多様な人々が集う新しいまちのような空間です。訪れた人が楽しみながら過ごし、地域の日常が育っていくようにと“まちをつくる”視点で構想されました。設計時に施主・運営者として参画したルミネの中村美香さん、吉田祐子さんにお話を伺いました。

ニューマン高輪  
[東京都]

## 100年先の心豊かな 暮らしを見据えた まちづくり

2025年9月、高輪ゲートウェイ駅に直結した複合施設「ニューマン高輪」が誕生しました。South・Northエリア、LUFTBAUM（ルフトバウム）エリアを合わせると床面積約52,000㎡、さらにこの春、隣接するMIMURE（ミムレ）エリアも新たにオープンし、合計約60,000㎡・約200店舗というルミネ史上最大規模の施設となります。単なる商業施設ではなく“まちをつくる”視点で進められているプロジェクトです。

国内最大規模のエキマチ一体の街「TAKANAWA GATEWAY CITY」は、JR東日本の都市戦略「広域品川圏」の中核を担う都市です。品川駅周辺エリア（品川駅北口改良・品川駅街区）のまちづくりと一体となった価値向上に向け、商業施設やオフィスに加えて今春にはレジデンスも誕生し、街全体がいよいよグランドオープンを迎えます。150年以上前、日本最初の鉄道が、海の浅瀬を埋め立てた築堤の上を走ったイノベーションの地・高輪。ここに再び人と文化が集う拠点をつくることは、JR東日本にとっても特別な意味を持っています。

ニューマン高輪はこの大開発の先陣を切る施設であり、100年先へ続く心豊かな暮らしを見据えたまちづくりを担っていきます。駅直結のターミナルで展開してきたこれまでのルミネやニューマンとは異なり、地域の暮らしに根ざした“まちの玄関口”としてにぎわいと居心地の良さをゼロから生み出し、育てているのです。

Northエリアのエントランス空間。2層分ある高い吹抜けは開放感があり、立体的に光がこぼれる。人々は街なかを行き交うように自由に巡り歩く。



エントランス空間を見下ろす。外の線路が見える大開口と、吹抜け上部に採用された耐熱合わせガラスの連窓が呼応し、見通しのよい爽やかな店内景観を生む。



エスカレーター空間を透明感のある耐熱合わせガラスが間仕切る。移動が楽しくなる視界の抜け方が特徴。木質調の方立が空間にリズムをもたらす。



高輪ゲートウェイ駅から見たニューマン高輪。右がNorthエリア、左がSouthエリア。

## まちに馴染み、地域と関わり、 共創価値が生まれる

まちの広がりがあるまま館内にも連続しているニューマン高輪の開放感は、エントランスの大きな吹抜けに始まり、見上げると上階の店舗にまで視線が通るよう吹抜けの一部に開口を設け、耐火性能の優れたファイアライト®を貼り合わせて高い衝撃安全性を備えた耐熱合わせガラスを使用しています。楽しそうな気配に誘われてふらっと立ち寄り、歩き進めれば気軽に休憩できる場所や作業のできるテーブルがあり、大きな窓からは電車が見える。そんな日常の風景を楽しむための空間を設えています。湾曲した動線によって数十メートル歩くだけで景色が変わるシークエンスも大きな特徴です。また、共用通路と店舗は互いの領域がにじみ合うよう、境界をあまいにして一体感を生み出しています。多様な体験をもたらすニューマン高輪らしさは、館内各所に表れています。たとえば28-29階の「LUFTBAUM」は、

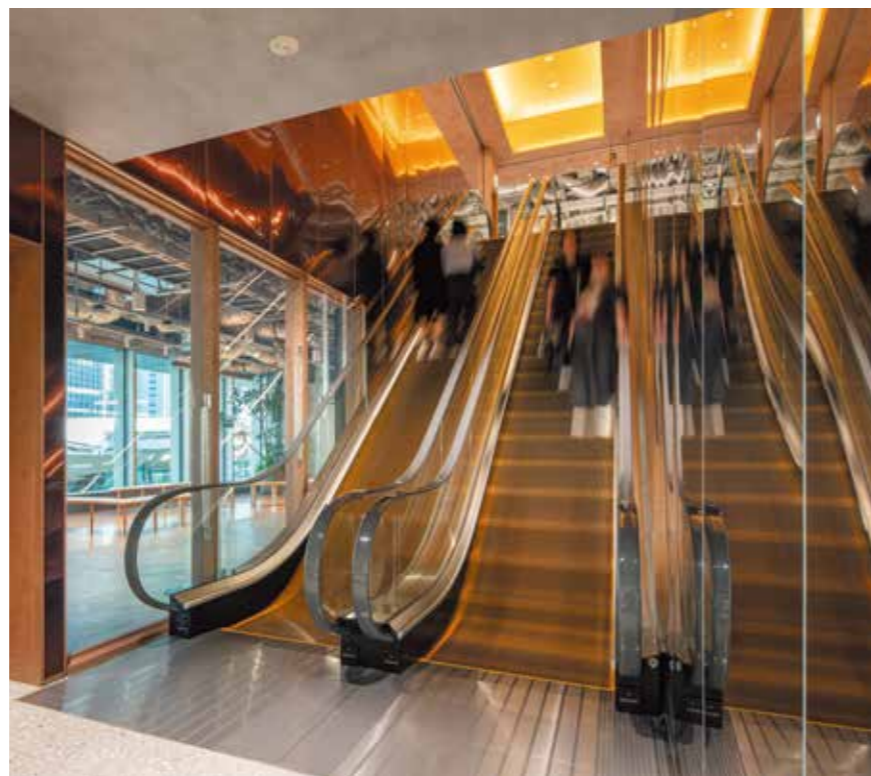
天空150mに“都心の別荘”を実現した圧倒的な植物空間です。また、本屋を軸とした「こもれびら」は大人も子どもも一日中楽しめるフロア。暮らすように過ごすことで、まちへの愛着が育まれます。これまで、ニューマンが得意としてきた女性客層だけでなく、家族連れやペット同伴など、地域内外の幅広い方々に親しまれ、地域の生活に溶け込みつつあります。さらに、資源循環サービス「anewloop (アニューループ)」では、お客様から不要となった衣料を回収して繊維へと再生し、新たな洋服を生み出しています。この活動には高輪中学校・高等学校が地域を代表して参画するなど、若い世代がサステナブルな社会を考える学びの場としても機能しています。こうした取り組みでは、まちと地域が共創価値を育む基盤づくりに力点が置かれています。



エスカレーター空間の大胆な吹抜け。木質調の仕上げが上階まで連続し、クリアな耐熱合わせガラスを使用した大きな開口部が各階ごとの風景を伝える。



エスカレーターと並行して光の筋が伸びる。



屋内移動しながら窓越しの景色に和む。

## 視界をつなぎ、立体的な空間体験を支える耐熱合わせガラス

館内の重要な動線として、駅から連続する2階レベルから5階までを貫くエスカレーター空間があります。これは単なる移動経路ではなく、ニューマン高輪の施設全体が持つ空気感を体現する場所として各設計会社と共に計画しました。各階の店舗の個性を引き立てながら、共用部としてのデザインを最も広く表現できる領域でもあります。ここでも耐熱合わせガラスを採用しています。この製品は、安全性を確保し

つつ、堅穴区画の空間でも開けた視界を楽しむために不可欠な建材であり、館内のエスカレーター周りの開口部の多くに使用しています。Northエリアでは、壁面のつながりを強調するためにガラスを入れる位置をあえてずらし、各フロアの区切りを感じさせないデザインとしています。上下に移動しながら吹抜け全体のボリュームが一望でき、さらにガラス越しにはフロアのにぎわいが感じられるという立体的な視覚体験を生

むことができました。エスカレーターに乗っている数十秒の間さえも退屈することなく、次の階への期待が自然と高まるような動線を意識したものです。

“心豊かな暮らしをつくり、行き交う人々とともにまちの風景になる”というニューマン高輪の思い描く姿がこの空間にもさりげなく息づいています。

(取材協力/ルミネ 中村美香様、吉田祐子様)

### 建物名称/ニューマン高輪

運営者/ルミネ 建築設計・工事監理/品川開発プロジェクト(第1期)設計共同企業体(JR東日本建築設計、JR東日本コンサルタンツ、日本設計、日建設計)  
 内装設計・デザイン監修/sinato、PRINT&BUILD(South・Northエリア)、MYU PLANNING(LUFTBAUMエリア)  
 内装実施設計・工事監理/大林組一級建築士事務所 施工/大林組(建築・内装)、乃村工務社(内装)  
 使用製品/耐熱合わせガラス 竣工/2025年 写真/家撮り部 田邊杏佳(P9-11、P13-14)、ニューマン高輪(P12)



まちを透すアトリウム空間は  
生まれ変わった  
広島の新しい玄関口。

路面電車が乗り入れる駅ビル2階の「中央アトリウム空間」。ホームには改札がなく、シームレスに商業施設と交通機能がつながる。

建物名称 / 広島駅南口ビル minamoa

事業主 / JR西日本不動産開発、中国SC開発、ジェイアール西日本ホテル開発  
基本設計 / ジェイアール西日本コンサルタンツ・東畑建築事務所設計共同体  
実施設計・監理 / 広島駅南口ビル新築他工事特定建設工事共同企業体(大林組・広成建設)  
施工 / 広島駅南口ビル新築他工事特定建設工事共同企業体(大林組・広成建設)  
使用製品 / 耐熱合わせガラス 竣工 / 2025年 写真 / 家撮り部 西川優介(P15、P16下)、大林組(P16上)



駅南側の駅前大橋から見る。路面電車の軌道が駅ビルへとまっすぐ伸びている。

広島駅南口ビル minamoa  
[広島県]

JR西日本・広島市・広島電鉄の三者連携による都市整備事業「広島駅南口再開発計画（広島駅南口広場の再整備等）」は、線路によって南北に分断されていた都市を、ひとつの連続した都市体として再構築することを目指しています。広島市が掲げる「コンパクトシティ」の理念のもと、公共交通の利便性・都市空間の質という両面の向上を図るこのプロジェクトは、単なるインフラ整備にとどまらず、都市のあり方そのものを問直す挑戦となっています。JR駅と路面電車乗り場の遠さや既存駅ビルの老朽化など積年の課題が

新生・広島駅の開放感を実現し、  
空間連続性を際立たせる防火ガラス

あった中、新駅ビル「minamoa（ミナモア）」の開業は駅空間全体の最適化を図るきっかけをもたらしました。広島電鉄の駅舎はビル内に移設、路面電車は2階「中央アトリウム空間」にダイナミックに引き込むことで、在来線・新幹線、路面電車が同一平面でつながったのです。利用者の乗り換えストレスも大幅に軽減されました。minamoaのエントランスに位置する2-3階のガラス開口部には、シースルーエレベーター4基の昇降路が設けられています。日本電気硝子の耐熱合わせガラスが使用された透明なスクリーン

は外部への視認性と開放感を両立させ、水平フレームの意匠も良いアクセントになっています。高い防火性能と耐衝撃性能を備えた合わせガラスならではの安心感を駅施設の利用者に提供しています。交通・商業・都市景観が一体となることで、単なる交通のためのコンコースではなく、居心地よく活気づいた都市の玄関口として再形成された広島駅南口。日本電気硝子の防火ガラスもこの新しい景観づくりに寄与しています。



耐熱合わせガラスによるシースルーエレベーター。ガラスが建物のファサードに美しい連続性をもたらす。

## 偶発的な出会いが生まれる空間で クリエイティビティを引き出し合う

品川車両基地跡地でJR東日本が開発を進める「TAKANAWA GATEWAY CITY」に象徴的にそびえる高層ツインタワー「THE LINKPILLAR 1」は、オフィス・商業・ホテル・コンベンションカンファレンスなどを有する複合施設です。このビルのNorth棟6-7階に、スタートアップ企業や新規事業の創出を支援するビジネス支援施設「TAKANAWA GATEWAY Link Scholars' Hub (LiSH)」が誕生しました。ここは国内外の多様な企業や人材が交流し、新たな価値を生み出す未来志向の実験場です。交通の要所に位置する場所性を活かし、グローバルなビジネスのハブとなることが期待されています。

LiSHの施設内では起業支援、事業開発、ネットワーキングイベントなどの展開が想定されています。6階は情報が行き交う「TERMINAL」、7階は人や情報が集まる「SQUARE」と帰属意識を深める「TOWN」とエリア分けし、公共性の高い「TERMINAL」からプライベート性の高い「TOWN」へとグラデーションで連続するような空間構成となっています。利用者がLiSHの空間全体を楽しみながら使いこなせるよう、行き止まりのない平面計画としているのが特徴です。人々の“移動”と“滞留”を意識しつつ、偶発的な出会いがより生まれ

るよう、垂れ壁や腰壁・天井の設えによって動線や領域をコントロールしています。また、方向性を持たない曲線的な什器は視線の向きや歩く方向に変化をもたらします。さまざまな素材や色を使った視覚的にも豊かな空間は、人々の創造性を引き出す一助となるはずです。

コミュニケーションスペースでは人数の違いに応じて使用する場所を選択でき、それぞれが自分のお気に入りの場所を見つけられるような多様な居場所をつくり出しています。クリエイティブな利用者たちの自由なふるまいを受け止められる、大らかな空間です。一方で、専門設備を備えたラボも設けられており、リアルに実験の場としても活用できます。

専門性の高い空間とパブリックな空間をつなぐのは透視性の高いファイアライト®Fです。網入りガラスよりもクリアで空間連続性を確保できる防火ガラスであることから採用しました。この空間でたまたま遭遇した利用者同士が、互いの活動を目にし、関係性やシナジーが生まれてLiSHならではの創造活動へと発展することを期待しています。

(取材協力/JR東日本建築設計 棟居克之様  
長堀美季様+濱本真之様+  
西岡憲弘様+オンデザイン様)

施設名称/TAKANAWA GATEWAY Link Scholars' Hub (LiSH)

建築設計/品川開発プロジェクト(第1期)設計共同企業体(JR東日本建築設計・JR東日本コンサルタンツ・日本設計・日建設計)  
LiSH(ビジネス支援施設)内装設計/オンデザイン  
使用製品/ファイアライト®F 写真/大丸剛史



実験し、交流し、  
化学反応が生まれる  
グローバルなビジネス創造拠点

ファイアライト®Fによって防火区画された7階のワークショップエリア。自然光が廊下まで届き、人の気配も静かに伝わる。



赤色が映える打合せスペース。奥のワークブースの窓にもファイアライト®Fが使用されている。



緩やかなカーブが生む穏やかな空間

# 都市に木造建築を取り戻す、 100年先を見据えた 銀座高木ビルの挑戦

銀座の街並みに新たな表情を加えた「銀座高木ビル」。高層部4層に木造を採用し、在来構法によってその技術を未来へと継承できる形とした、都市における木の可能性を探った挑戦的な建築です。構造・素材・デザインを横断し、次世代にひらかれた高層木造のあり方を提案した設計者、山路哲生さんにお話を伺いました。



ビルの上層4階は木造。8階建てのオフィスビルの上に積まれた木の箱は、ビル群の中で浮遊しているように見える。



銀座の地に新築された地下1階・地上12階建ての複合商業施設。



1階アプローチ。鉄骨の柱や天井の仕上げも木質素材で揃える。

## 銀座高木ビル [東京都]

「銀座高木ビル」は、虎ノ門を本拠地とする不動産会社が手がけたフラッグシップビルです。社長の代替わりのタイミングで銀座の土地を取得し、「100年後も残る建物をつくりたい」との要望からプロジェクトが始まりました。一般的に都市の小規模テナントビルは容積を最大化して事業効率を優先する傾向にありますが、この建築では次世代の社会において新たな価値を生み出す商業ビルのあり方を見据え、都市における木造高層建築という新たな

## 銀座に楔を打つ「木造高層」への挑戦

な可能性を、上階4層のみの木造化によって提示しました。全階を木造にすれば構造上の応力が大きくなり、柱断面が巨大化しますが、上階4層のみであれば1時間耐火で対応でき、コストを抑えつつインパクトのある空間を実現できると判断した次第です。設計に約2年、工事に約3年、構想から5年以上を要して本プロジェクトは結実しました。構造面では、9階の床レベルで鉄骨造と木造を接合しており、木の仕口を在

来構法でつくり、スチールプレートとドリフトピンで鉄骨躯体と接合する方法を採用しました。大手ゼネコンが出している認定構法とは異なり、地域の中規模施工者でも木造高層を実現できる技術です。次の世代に引き継げるよう「都市木造の民主化」を進めることで、都市の商業施設の過半を占める雑居ビルのあり方が変わり、都市の風景自体も変化していく未来がありえると考えています。



10階店舗。内装は構造材を活かし、仕上げの木質素材も含めて多摩杉材を使用。網のないクリアなファイアライト®の窓が屋内外の風景をつなぐ。

## 構造体と内装を同一素材とし、 建築自体を体験できる空間へ

木造のビルの魅力を惜しみなく引き出すため、高層階は内装でも構造体を隠さずに柱や梁を露出させ、壁面も構造体と同じ素材で統一しました。オフィスビルの運用を考えると、内装工事では構造体を隠して用途によりクロスを変更できるようにする方が合理的ですが、それは「建物を体験できないインテリア体験」という分断を生む原因でもあります。インテリアが持つ従来の役割を超え、「建築が内装になっている」という仕上げにすることで、建築の存在そのものを感じる空間体験を提

供することができると思います。外堀通りに面する窓面は、外部とのつながりを強調する大開口としています。代替進入口を兼ねる引き戸には、破壊進入が可能な厚さ6mm以下のガラスが必要であったため、厚さ5mmの耐熱結晶化ガラス ファイアライト®を採用しました。上層階の楽しさがまちにこぼれるインターフェイスとして最も透明性の高い選択を突き詰めた結果であり、この製品がなければこの開口設計は成立しなかったと言えます。銀座という街で、56mという高さに木

が現れること。それは、かつて55mの東寺五重塔を誇った日本の木造文化を現代の都市に取り戻す試みでもあるのです。

(取材協力/山路哲生建築設計事務所  
山路哲生様)

建物名称/銀座高木ビル  
設計/山路哲生建築設計事務所  
施工/坪井工業  
使用製品/ファイアライト® 竣工/2023年  
写真/平井広行(P19、P22下)、  
田村友孝(P21、P22上)



木質の風合いが夜景に映え、銀座の街並みをやわらかく切り取る。

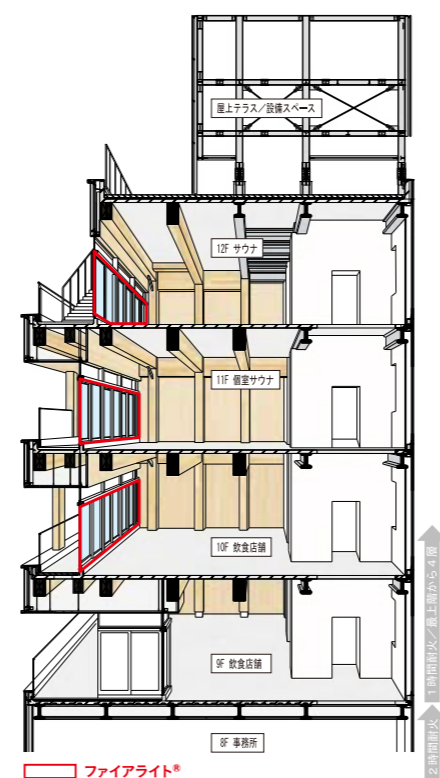


躯体の見える仕上げ前。木の構造体と内装の木質素材が同質で連続している。

## 銀座の「広告塔」に抗う、木構造と同質のファサード

銀座の街並みをマッピングしてみると、多くの華やかなビルが「巨大な広告面」としての顔を見せていることが分かります。でもその内部は単なるオフィスやプライベート空間にとどまり、表層と実体が乖離しているのが実態です。このビルはあえて木造らしい外観にするため、外装材も木質化しています。エイジングやメンテナンスに対する細かな検討は必要ですが、内部と外部に整合性のある建築とすることで銀座というディープな都市に漂う不明瞭さを払拭し、人々が安心してアクセスできる空間を目指しました。ルーフトップには人が集う快適な場を設け、市民が高層階にアクセスできる新しい都市体験を生

み出しています。外装の木部には、浸透性の塗料に近いガラスコーティングを施しています。都市部の高層建築での前例がなかったため、メーカーとともに1年間の曝露試験を行いました。浸透性が高く、劣化や剥離を防ぎ、雨水で自然洗浄される性能も発揮します。外装パネルは交換可能なパネルユニットとし、将来のメンテナンスにも対応しています。高温多湿、且つ紫外線の強い場所で木造を外装化する難易度は高いですが、この外装は結果としてビル全体の象徴性を高め、歴史ある銀座の街並みに新たな視覚的アイコンをもたらしました。



## 注目製品

### 火災時の高温と急冷に耐える唯一の防火ガラス、ファイアライト®

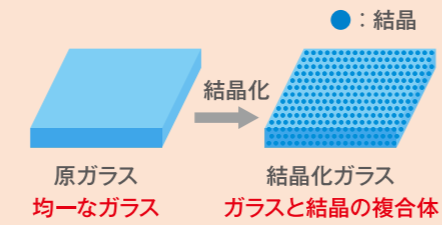


火災時の急激な温度上昇、そして消火活動の放水による急冷。このような過酷な状況下でも割れない、確かな性能を持つ防火ガラス。それが耐熱結晶化ガラスから成る「ファイアライト®」です。

「結晶化ガラス」はガラスと結晶の複合体です。通常のガラスは結晶を持ちませんが、特殊な組成のガラスを再加熱し、ガラス内部に結晶を均一に析出させることで従来のガラスにはない特性が備わります。

その特性の一つが、優れた耐熱衝撃性です。ガラス内部の結晶の作用によって熱膨張が極めて小さく抑えられる結晶化ガラスだけが火災時の急激な温度上昇、そして消火活動時の放水による急冷に耐え、防火ガラスに求められる性能を十分に満たしています。

#### 耐熱結晶化ガラス ファイアライト® とは？



ガラス内に均一に結晶を析出させた複合体

### ファイアライト® シリーズ— 安心・安全な空間設計に定めるラインアップ

用途や設計条件に応じたファイアライト® シリーズ各種の適切な選定が、火災時の安全性を確保しながら、快適で開放的な空間づくりに寄与します。

製品名	分類	ガラス構成	共通の特長	主な特長
特定防火設備・防火設備用ガラス ファイアライト®	単板ガラス	ファイアライト®	<ul style="list-style-type: none"> <li>・熱膨張係数がほぼゼロなので、熱衝撃に非常に強い</li> <li>・自然破損のおそれがない</li> <li>・網のないクリアな視界</li> <li>・フロートガラスと同等の透明度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・切断加工が可能</li> <li>・型板タイプあり(カスミ)</li> <li>・複層ガラスの構成部材としても使用可能</li> </ul>
特定防火設備用ガラス ファイアライトプラス® ネオ	合わせガラス	ファイアライト® 特殊樹脂フィルム		<ul style="list-style-type: none"> <li>・合わせガラスならではの、高い衝撃安全性</li> <li>・メンテナンスフリー</li> <li>・優れた遮音性</li> </ul>
特定防火設備用ガラス ファイアライト® F	単板ガラス フィルム貼り	ファイアライト® フィルム		<ul style="list-style-type: none"> <li>・飛散防止フィルムや防犯フィルムの貼付による衝撃安全性の向上</li> <li>・幅広いデザイン性</li> </ul>

### Choice 1 単板ガラス ファイアライト®

ファイアライト® は、網のない、すっきりとした視界で開放感ある空間設計が可能な特定防火設備・防火設備用ガラス。耐熱強化ガラスに見られる自然破損<sup>※</sup>や、網入りガラスに見られる熱割れやサビ割れの心配もありません。

近年では複層ガラスへの採用が増え、防火設備としての機能を備えながら省エネに貢献する高性能断熱窓の実現に寄与しています。

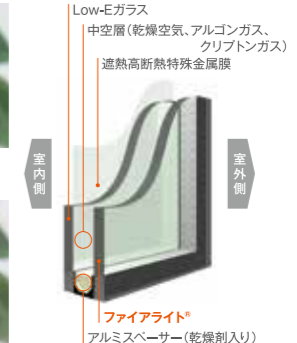
※外力がかかっていないにも関わらず不意に破損する現象。



ネオ(透明で高い透視性)



カスミ(型板タイプで視線を和らげる)



Low-E 複層ガラスの断面例



採用例

### Choice 2 合わせガラス ファイアライトプラス® ネオ

ファイアライトプラス® ネオは、2枚のファイアライト® を貼り合わせた特定防火設備用ガラス。人や物の衝突、あるいは地震などで万が一破損しても、ガラス片の飛散や脱落がほとんどありません。見通しのきく明るい安全空間を守ることから、不特定多数の人々が集まる公共施設や駅舎、商業施設、教育施設などに最適。火災への備えはもちろん、日常的に高い安全性が求められる施設に適しています。



断面写真



ショットバッグ試験



採用例

### Choice 3 フィルム貼り ファイアライト® F

ファイアライト® Fは、ファイアライト®(単板ガラス)に飛散防止または防犯フィルムを貼付した特定防火設備用ガラス。

フィルムによって破損時のガラス片の飛散や二次災害のリスクを抑え、安全性を確保します。さらに、貼付するフィルムの種類によって色合いや雰囲気調整でき、空間デザインの幅を広げます。



ファイアライト® Fイメージ



ガラス飛散防止イメージ



採用例

#### 飛散防止フィルム

ショットバッグ試験JIS A 5759:2016の高さ30cmと同等の性能があり、ガラスの飛散や脱落を防止します。

#### 防犯フィルム

ショットバッグ試験JIS A 5759:2016の高さ120cmと同等の性能があり、衝突によるケガの低減に役立ちます。

#### 使用可能なフィルムの厚さ

ガラスフィルム(JIS A 5759)の基材厚  
 ・飛散防止フィルム…PET基材厚50μm  
 ・防犯フィルム…PET基材厚325~375μm

# 滞在そのものが旅の目的となる、 日本の美意識が凝縮された アートミュージアムホテル



外界の喧騒から切り離された車寄せ。天井高約7mの空間には艶やかさと重厚感をまとうネオパリエ®の八角柱が並び、柱頭の金箔風装飾と淡いゴールドの天井が華やぎを添える。

## エスパシオ ナゴヤキャッスル [愛知県]

「エスパシオ ナゴヤキャッスル」は、名古屋中心部からほどよい距離を置く落ち着いた環境にあり、名古屋城のお堀に隣接する宿泊施設です。「旧ホテルナゴヤキャッスル」の跡地に建て替えられ、生まれ変わりました。260年の繁栄をもたらした尾張徳川家の象徴である名古屋城との調和を意識した格式高い佇まいが印象的で、国内外の富裕層やインパウンドのハイエンド旅行者、国際会議参加者などの利用が想定されています。旅の目的地そのものとなるような美と贅を極めた空間は“現代に息づく奥御殿”とも言えます。

大きな特徴は、日本の伝統と現代的なラグジュアリーを融合させた空間デザインです。日本を代表するアーティスト6名が設えた特別な客室があるほか、伝統工芸を現代的に再解釈したアートワークが随所に配置され、空間

## デザイン・設計・施工技術が三位一体となり 唯一無二の「八芒星」の柱が実現する

全体がひとつの美術館のように調えられています。200㎡超のプレジデンシャルスイートをはじめ、平均70㎡超の広々とした客室には全室ビューバスを採用。室内は組子、和紙、唐紙、漆、箔などの日本の伝統工芸で設えられています。館内には国内最大級のバンケットルーム、8つの多彩なダイニング、世界基準のスバ、室内プールなどが完備。専属パトラーによるパーソナルサービスから、バルコニーでのプライベートダイニングまで、細部にわたり快適性が追求されています。

高天井約7メートルの荘厳なエントランスホールに聳えるのは「八芒星」形状の柱です。仕上げには黒のネオパリエ®が使用され、重厚で艶やかな質感がホテルの別格感を表現しています。東洋文化における人間の精神・運命・再生・完全性の象徴である「八芒星」

のデザインは、調和や超越などの意味も内包する他に例を見ないので、工法から材料選定、サイズやディテールまで試行錯誤を重ねられました。あらかじめ工場で組んだネオパリエ®のユニットを現場で効率的に施工することで、意匠性と施工精度を両立した柱構造が実現しました。

国内外のゲストが日本の美意識に触れ、最上のおもてなしを享受できるよう妥協なくつくられたこの空間は、滞在そのものが記憶に残る体験となる価値を生み出しています。

(取材協力/興和様)

### 建物名称/エスパシオ ナゴヤキャッスル

設計/日建設計 施工/竹中工務店  
使用製品/ネオパリエ®ブラック 竣工/2025年  
写真/家撮り部 森田真悠(P25、P26左、右上)



ゲストが到着した瞬間から特別感を感じられる上品なエントランス。



存在感ある柱と石垣、ガラスのファサードが調和した和モダンの空間。



緑豊かな名古屋城を臨む。

北側の階段吹抜け。ガラスブロックの大壁面から繊細な光が降り注ぐ。  
側面塗装のガラスブロックは、正面から見ると無色に見える。



## ガラスブロックの壁面が 校舎に“もうひとつの正面”を生み出す

「千葉日本大学第一小学校」は小・中・高一貫教育の学校として1985年に設立し、2025年、40周年事業として校舎の全面改修で生まれ変わりました。表面的な“お色直し”ではなく、既存校舎の印象を一新するほどの劇的な変化を遂げています。今回の改修で、児童にも、歴史にも、環境にも「やさしい校舎」が実現。増築部分のガラスブロックによる大壁面は、小学校の“顔”となるシンボリックな表情を創出しました。国設計の本田貴志さん、池田知穂さんにお話を伺いました。



さくらホール、大階段へと連続する空間をエントランスから臨む。児童が日々元気に活躍するステージでもある。

### 千葉日本大学第一小学校 〔千葉県〕

「千葉日本大学第一小学校」は2025年秋、創立40周年事業として進めてきた校舎改修を完了し、新たな学びの場として生まれ変わりました。「児童にやさしい／歴史にやさしい／環境にやさしい」という三つの“やさしい”を叶える校舎をつくりたいという先生方の願いのもと、建て替えではなくフルリノベーションを選択。教育活動への負担を抑え、コストも抑えながら“建て替え級の変化”をもたらすという計画が実現しています。

### “建て替え級の変化”をもたらす フルリノベーション

既存校舎には「教室ごとの光環境にばらつきがある」「廊下空間が活かされていない」「トイレが暗い」など配置計画上の課題があったため、グラウンド側にボリュームを張り出す形で増築し、校舎全体を再編しています。トイレと階段を増築部分に新設することで教室の明るさを妨げない配置となり、さまざまな教育活動が可能な広くて明るい教室は、可動間仕切りを開ければ廊下とひとつながりで使えます。「児童にやさしい」ことを最優先にしたブラ

ンです。グラウンド側への増築は、敷地内に同居する中学・高校への配慮を要しましたが、これまで校舎の裏面を見せていたグラウンド側に“もうひとつの正面”ともいえるシンボリックな表情が生まれ、学園全体の雰囲気も底上げされました。

## 改修は「やさしい校舎」を生み出す手法

1階エントランスの正面には、この学校の特徴でもある学年を越えた活動「さくら活動」を支える「さくらホール」を新たに設け、その延長にステージのように使える大階段を配しました。ここは階段動線の一部であると同時に、発表や集会の舞台へと自然に拡張できる場です。児童が楽しみながら主体的に活動できる空間として、日常にひらかれています。新しい校舎がこれからつくる時間と、これまで長く積み重ねてきた時間をともに尊重する「歴史にやさしい」空間が生まれました。

床は使い続けてきた無垢板のフローリングを丁寧に磨いてそのまま使い、新築部分も同じ素材にしながら経年の違いが色の違いとして見えることを楽しみます。また、素材と色との組み合わせによって日常空間が一層豊かになるように、さくらホールや掲示スペースには木質素材にアクセントカラーを施しました。共用部は明るい光と色に満ち、素材を感じる「環境にやさしい」空間として表現されています。



見る角度によって表情が変わる側面塗装のカラーガラスブロックの壁。安全性・透光性・遊び心を同時に満たす。



夜には屋内の光が外へとこぼれ、行燈のような存在感を放つ。ガラスブロックそれぞれの色が可憐な表情を生み出す。

## 建築の表情をつくり、覗き込めば教材になるガラスブロック

張り出し部分である階段・EV棟は、北側の面から光を採り入れる外装素材としてガラスブロックを採用しています。一般的には暗くなりがちな北面ですが、ガラスブロック越しの光が廊下や教室、階段まわりまでやわらかく届き、校内の雰囲気を一変させました。また、グラウンドに面する箇所であるため、野球の硬球が衝突する可能性を想定したテストを行い、ガラスブロックの安全性の実感値を関係者とともに共有しました。大胆なガラスブロックの連続面は、ひとつの壁として見えるよう工夫しています。方立や見付を極限まで細く抑え、

上下の取り合いもコンクリートを巻き込むことで、見え掛かりを躯体と一体化させています。ディテールを緻密に整えた結果、ガラスブロックの連続体は校舎の“もうひとつの正面”としてシンボリックに立ち上がりました。ガラスブロックはこどもの感性に訴える素材であり、教材のように活かすことができます。正面から見るとほぼ無色なのに、歩きながら視点が移動することで色が次々と立ち上がって見えてくる。そんな側面着色のセラミックカラーシリーズを採用しました。また透視性の高いプレーンのガラスブロックをメインに使いつつ、ごく点的にたまゆ

らを散らしています。その違和感に気づいて顔を寄せたり、覗いたり擦ったりしてもらえたらという願いを込めました。光の拡散と屈折を生み出すガラスブロックは、時間帯や視点によって多様な表情を見せる豊かな光の媒介体です。制約の大きい学校建築のデザインに貢献するだけでなく、ガラスブロックはこどもたちに発見をもたらす学びの道具としても活躍できるのではないでしょうか。

(取材協力/国設計 本田貴志様、池田知穂様)



グラウンド側から見た校舎。“もうひとつの正面”が生まれた。



建物名称/千葉日本大学第一小学校

設計・施工/北野建設 設計・監理協力/国設計  
 使用製品/ガラスブロック プレーン190角、たまゆら190角、プレーン・セラミックカラー(オレンジ、スカイブルー、イエロー、ブルー、モスグリーン)190角、メタリックカラー(メタリックピンク)190角  
 竣工/2025年 写真/大丸剛史



## 嬉野の老舗旅館に生まれた、豆腐文化の新拠点

佐賀の豆腐文化を支えてきた老舗豆腐店が、新たに「佐嘉平川屋 in 和多屋別荘」をオープン。光や景色を繊細に取り入れ、豆腐体験に没入できる空間が丁寧に立ち上げられています。設計を手掛けたケース・リアルの二俣公一さんにお話を伺いました。

1



2



3

1/ガラスブロック越しに伝わる庭の緑が、カウンターのクォーツストーンの色味と呼応する。2/ハウスパネルの支持部材にフレームを取り付け、深い額縁とした。3/旅館の庭園を通り、店舗エントランスへと至る。

### 佐嘉平川屋 in 和多屋別荘 【佐賀県】

1300年の歴史を持つ嬉野温泉にある旅館「和多屋別荘」1階に、新たな店舗を開店した老舗豆腐店「佐嘉平川屋 in 和多屋別荘」。1950年に創業し、大豆の産地・佐賀の名物料理である温泉湯豆腐を提供し続け、地域に長く親しまれてきた老舗です。この店舗では、歴史を踏襲しながら伝統的な趣にとられることなく、歴代の建築家が進歩的な改修を行ってきた「和多屋別荘」と融合しつつ、現代の感性が息づく食空間を表現しています。

店の外部には和多屋別荘が大切に育ててきた庭があります。その風景を店

### 歴史を受け継ぎ現代へとひらく、 ライブ感ある豆腐体験

内に取り込む時、外部と接する開口部のある二辺をそれぞれ二つの方法で扱っています。美しく整えられた庭に接する一辺では透明ガラスを用いてそのまま風景を店内に導き、駐車場や隣接する建物が庭の向こうにうかがえるもう一辺ではガラスブロックを用いるという対応です。ガラスブロックを透過して抽象化された景色と光を受け入れることで、店内に明るい静寂が生まれました。豆腐料理の空間としての独立性を確保し、柔らかく仕切るといったバランスに配慮しています。店内には、調理風景を体感できるエン

ターテイメント性を孕んだ客席空間を設えました。L字のハイカウンターに座ると、鍋から湯豆腐を引き上げる、湯葉をすくう、豆腐を香ばしく焼くなど調理の所作を間近で楽しめます。食べるまでのプロセスをも味わえる、「佐嘉平川屋」の新たな挑みです。また、豆腐に合う色を求めて、カウンターと背面の壁はライムグリーンのクォーツストーンで仕上げられています。ガラスブロックの開口部から淡く見える庭の緑とも呼応し、馴染み合う配色を心掛けました。



美しく整う旅館の庭園に、店内からの光が柔らかくこぼれ落ちる。



個室に外光を招き入れ、視線はやわらげるガラスブロック壁。



半円状の見切り材がガラスブロック壁のアクセントとなっている。

アルミプレートを用いるメタルジョイント工法で目地を極めて細く。  
ガラスブロックのみで端正に積層しているように見える。

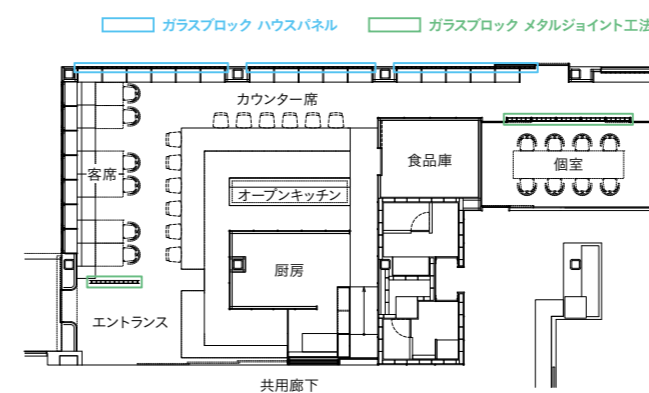
## 情報を調整し、異なる空間を繊細につなぐガラスブロック

外部に面するガラスブロックは、ハウスパネルを採用しています。目地幅が5mmと細めの目地である点が魅力です。なお、開口部上部の薄い壁の中には排煙窓を組み込み、設備の存在感を極力消すよう処理しています。壁面の一体感を生み出す精度の高いディテールを積み重ねているわけですが、ハウスパネルの細い目地幅は全体のデザインの整合性に大きく貢献していると言えます。ガラスブロックは小さなモジュールの連続でできており、面として見たときにディテールの密度が上がります。室内側はハウスパネルの支持部材である方立材や無目材に木製のフレームを取り

付けて深い額縁とすることで、普段とは異なるガラスブロックの見せ方ができたと感じます。また、室内にもこの空気感を連続させるべく、旅館と店舗の境界に置くパーティションや個室の仕切りにもガラスブロックを採用しました。これらはメタルジョイント工法で、アルミのジョイントパーツによる目地幅が3mmという細さでシャープな仕上がりが特徴です。初めて見る方からも「すっきりと洗練した印象で驚いた」と声をかけていただきました。断面が半円状になった縦の見切り材は、クォーツストーンや板張りの壁面の見切り材と同じディテールで揃え、割り付けはガラスブロックの寸法

と同ピッチにするなど細部まで整合性を保ち、空間のリズムを整えています。必ずしもクラシックな和の空間とせずとも、繊細に整えられたモダンな空間で改めて豆腐と出会うことで特別な時間が生まれるのではないかと考えます。「和多屋別荘」という日本旅館と違和感なく共存し、この土地らしさと未来性をともに叶えつつ新しい豆腐文化を佐賀に根付かせていく。そうした「佐嘉平川屋」の包容力や未来志向をこの店舗は実現しています。

(取材協力/ケース・リアル 二保公一様)



### 建物名称/佐嘉平川屋 in 和多屋別荘

設計/ケース・リアル  
クリエイティブディレクション/KATATA YOSHIHITO DESIGN  
設計協力/design office TERMINAL 施工/グレイス  
使用製品/ガラスブロック ハウスパネル(カスミ)、カスミI45角  
竣工/2025年 写真/水崎浩志



店舗の外にはのんびりくつろげる足湯が設けられている。



旅館内からも店舗にアプローチできる。パーティション向こうは客席。

お問い合わせはお近くの販売店まで

販売店

**電気硝子建材株式会社** <https://www.negb.co.jp/>

[仙 台] 〒985-0874 宮城県多賀城市八幡4丁目3-5  
TEL.(022)781-9581 FAX.(022)781-9582

\*[東 京] 〒130-8513 東京都墨田区立川4丁目15-3  
TEL.(03)3632-7721 FAX.(03)3632-3150

[名古屋] 〒451-0084 名古屋市西区上堀越町2丁目19-1  
TEL.(052)522-5491 FAX.(052)523-3075

\*[大 阪] 〒532-0003 大阪市淀川区宮原2丁目11-1  
TEL.(06)6392-2711 FAX.(06)6392-2911

[福 岡] 〒812-0016 福岡市博多区博多駅南5丁目22-4  
TEL.(092)483-3371 FAX.(092)482-2575

\*ショールーム併設(9:00~17:30 土・日・祝日休み)



## 環 WEB版のご案内

採用例や建材製品の紹介、インタビュー記事のほか、  
本誌『環』のバックナンバーをWEBで公開しています。



<https://www.negb.co.jp/kan/>

**Neg** 日本電気硝子株式会社

建材ニュース[環] No.87

編集・発行/建材ニュース[環]編集室

発行/2026年2月

